

2023. 2. 19. 主日礼拝説教  
聖書：ルカによる福音書16章19～31節  
『人生の整え』

子どもの頃、「悪いことをした者は死んだら地獄に落とされて針の山や血の池や坊主地獄で苦しみなあかんし、嘘ついた者はエンマさんに舌を抜かれるんやで～」などと母親に毎度おどされたものです。こういったいわゆる因果応報物語はどここの国でも似通ったものようです。

本日の箇所は「金持ちとラザロ」という小標題のもとに始まります。もともとこの物語は、パール・マアヤンという金持ちの徴税人と貧しい律法学者が登場するユダヤ教の持つ因果応報物語を下敷きにしてルカが書き下ろしたものです。ユダヤ教世界では当時すでにこのような因果応報の思想が蔓延していたことがよく分かります。

ルカは冒頭で「ある金持ち」と「ラザロ」を対極的に描き出します。本来、ラザロという名前はエリアザル、つまり「神は助ける」という名前の短縮形(通称)なのですが、ルカはそんな信心深そうな名前などには一切関心を寄せることなく、彼の生前の悲惨を描いてゆきます。「できものだらけ・貧しい・食卓から落ちるもので腹を満たしていた」などと酷い表現が続きます。ところが死んでからは形勢逆転、反対に地獄の業火にさいなまれる金持ちは、アブラハムの側で憩うラザロがうらやましくって仕方がないという展開です。

実はユダヤ教神学には死後の世界について明確に統一された思想や説明はありませんでした。漠然とした民間伝承のような形で捉えられていたに過ぎないのです。生前、貧しかった者が死後には豊かになるという筋書きも、これらの伝承が一般民衆の中から派生したであろうことが推察されます。罪を犯した者は薄暗い地下の世界(ハデス)で報いを受けるという因果応報の考え方が主流だったのです。

さて、それではルカはそのような死生観を福音に取り込もうとしたのでしょうか。違います。

そのためにルカはこの金持ちに「アブラハムよ」(24)と血縁に頼る叫びをあげさせ、「兄弟がいます」(28)と血のつながりを主張させます。それらは25～26節、29節と31節で完膚無きまで否定されてゆくのです。ここでルカが強調するのは、信仰とは「ひとり」という自覚なのです。

人というものは少なくともお互い助け合って生きて行くものなのです。そこでようやく社会的な役割や責任をまがりなりにも果たして行くことが出来るでしょう。

しかし、そんなことよりもさらに大切なことがあるのです。それは「ひとり」を自覚することです。ひとりを自覚するとは、この金持ちがこの期に及んでも血縁を無自覚に頼むことしか出来ないというあらすじに示される場所の「我意から自由になろうとしない罪悪」のことなのです。今まさにわたしという「ひとり」が問われているのに、それを認識出来ないという「自分自身への無関心と無責任」のことなのです。

信仰、つまり福音理解というのは、この「無関心と無責任ゆえの我意から自由になれない罪悪」を脱却したり、解決したりではなく、お互いが「この罪悪」に生きているという現実を同一線上に捉え直すという「平等の自覚」のことなのです。ここに「人生の整え」があるのではなかったでしょうか。